



「安達太良山」行

梅雨前線の停滞する中、四台の自家用車が、静かに水戸を滑り出した。富永農林統計係長を団長とする一団17名は、己の限界に挑戦すべく、小雨降る6月12日安達太良山に挑んだのであった。排気ガスをまき散らしながら、宇都宮I・C（インターチェンジ）に入り、ロードレースを展開しながらもぶじ岳温泉に到着する。予定より1時間以上もオーバーしていたため、すぐに着替えをして、午後3時登山開始。

一行のうち6名が女性のため、始めの頃にはハズんだ声が聞えて来たが、10分、30分と登るにつれて次第にその声も小さくなり、1時間を過ぎた頃には「甲問者の一行」のごとく……。私は一行よりすこし遅くなってしまったため、しかたなく一人静かに小鳥のさえずりに耳をかたむけながらも、重い足どりで歩いていた。幸いにして登山中には雨もなく、時おりガスの切れ間からのぞく尾根と、高山植物の可憐な花が、疲れた私達を愉かに、今夜の泊り「くろがね小屋」へと導いてくれた。私は常々、山の楽しみは、山小屋の一夜にあると考えている。とくに今回のように、大パーティーの時には。

今夜のおかず（スキヤキ）作りには半数の者が担当し、残りの者が荷物等の整理、さらに明日の昼食（サンドイッチ）の用意と、既婚者は独身時代のうす暗い台所を思い出し、独身者は明日のわが身を夢みながら各人各層の思いで仕事にかかったのである。不器用な手で作ったサンドイッチが、何んとうまかったことか。

さて今夜の山小屋には、100人からの宿泊者がいたが、幸運にもわれわれのパーティーが、同室になることが出来た。私としては、もっともの喜びであった。ここですこし「くろがね小屋」の案内をしておくと、収容人員は約100名、他にテント場所があり、その他発電設備・浴室（温泉）付きの山小屋である。消燈の9時までの間は、アルコールを廻して、余興あり、コーラスありで、山小屋最大のイベントタイムである。どこの職場にも、旅行や宴会等になると、さらに力量を発揮される方が一人や二人はおられることと思います。わが統計課にも、ご多分に漏れず知る人ぞ知る方々が、今回の登山に参加しておられたため、結局知

られたる方々のためのハイキングではなかったかと、考えながら眠りにつく。

2日目午前4時起床。普段なら当然眠りの中であるのに、子供の頃、学校の行事で遠足等の朝、なぜか一人で目が覚めたように、今回もなぜか起床することが出来た。山の冷水で洗顔すると、今まで開放されていた気分が突然現実的になり、家に残した子供のことなどを考えたりする。

小屋を出て1時間位で、「馬の背」に着く。山頂に向って右崖下には「沼の平」が、白の砂地と茶褐色の噴火壁の美しいコントラストを見せていた。ところどころにシミのようになって残っている残雪に、ミルクを入れて食べた時、歯にしみ込む冷たさが、普段無気力な生活をしている私に“生きている”ことを教えてくれたような気がした。今までも何かに疲れた時は、別の何かに熱中することにして来た。それは山でも良いしまた野球でも良い。とにかく汗を



流し、身を疲労の中に沈める。しかし、どうして仕事となると、夢中になることが、できないのだろうか！

何かをしなければならないのに、何も行動に移れない臍甲斐無さ、そして他人の目を意識する不安感。このようなつまらない事を考えてしまうのは、私だけなのだろうか。山頂で誰かが言っていた。「お前、下痢(下り)に注意しろよ。」って。

自然の雄大さと温もりに憧れるのは、私かいつも何か（下痢）を、恐れているためなのかもしれない。

（細谷）

迷解植物辞典 (第4回)

【な ～ は】

なす (茄子) ……〔原義〕なす科の一年草。夏から秋にかけて、紫色の花を開き、暗紫色・倒卵形の実を結ぶ。食用。なすび。

〔派生〕「秋茄子は嫁に食わずな。」というのは、いじわるな姑。『うまいものは嫁に食べさせたくない』という思いが言わせるのだという説がある。うまいものを一人占めしたいという気持は皆同じこと、ただ年老いて気持のセーブができなくなって露骨にそれが出てくるのだろう。もう一つの説に『うまいものを食べすぎて腹をこわしては大変だ。』というのがある。ずい分違うものである。

いじわるな嫁がいうことわざ、「ポーナスは亭主に食わせるな。」

にんにく (大蒜) ……〔原義〕ゆり科の多年草。全体に強い臭気をもち、地下に大きな鱗茎がある。夏、紫がかった白色・肉質で小さな花を開く。鱗茎・葉は食用・薬用。

〔派生1〕強精剤として有名。取りすぎると様々な弊害をもたらす。「過ぎたるは……。」である。

〔派生2〕吸血鬼ドラキュラが最も嫌うものの一つ。なぜにんにくを嫌うのか、わからない。

われわれが最も嫌うのは借金取りである。どんな美人だろうと、請求書を持ってれば、われわれは近よらない。

ぬるで (白膠木) ……〔原義〕うるし科の落葉きょう木。山野に生じ、夏、黄白色のこまかな花を開く。葉・枝に生ずる五倍子ごばいしからタンニンを採取し、染料に使用する

〔派生〕五倍子(ゴバイシ、フシ)は、ぬるでに、あぶらむしの一種である「ふしが」がうみつけた卵がかえって生じる袋状の物である。あぶらむしの恩恵を蒙っているのは蟻だけではなく、廃棄物の再利用もすで行われていたのである。

ねぎ (葱) ……〔原義〕ゆり科の多年草。茎は鱗茎から群生して筒形。初夏、白色のこまやかな花を球状に

開く。葉は食用。ねぶか(根深)。

〔派生〕「鴨が葱を背負ってきた」略して「鴨葱」とは、よいことづくめが先方から勝手にやってきたという意味である。「棚から牡丹餅」というのも同様な意味であるが、こういうことは滅多にあるものではない。それにくらべて、「泣き面に蜂」、「こけた上を踏まれる」ということは、実によくある。パチンコですられ、マージャンですられ、傘がないのに雨にでも降られれば、もう「踏んだり蹴ったり」である。

のぎく (野菊) ……〔原義〕きく科の多年草。田野に生じ、秋、うすい青紫色の頭状花を開く。若葉は食用。よめな(嫁菜)

〔派生〕政夫とその従姉民子との悲恋を描いたのが、伊藤佐千夫の「野菊の墓」である。夏目漱石がこの小説を「自然で、淡泊で、可哀相で、美しく、野趣があつて」こんな小説なら「何百篇よんでもよろしい。」と評したとか。この迷解植物辞典を「不自然で、しつこくて、ばからしくて、もう読みたくない」と評する読者諸氏よ、かわりの原稿をお願いします

はす (蓮) ……〔原義〕ひつじぐさ科の多年草。池・沼に栽培され、夏、うす紅色(白色)で大形の美しい花を開く。地下茎・種・若葉は食用、実は漢方薬用。はちす。

〔派生〕「蓮の台に乗る。」とは、死んで極楽浄土に行くことだが、極楽浄土という所、お釈迦様と同じように蓮の上に乗っているだけでは、お世辞にも楽しい場所とはいえない。それに比べ、行ってみようという気のあるなしは別として、地獄のイメージというのは豊富である。さまざまな地獄のせめ苦や赤鬼・青鬼どもの姿は、絵巻物などでもよく見かける。

梅原猛氏は、「地獄の思想」という本の中で、この地獄のイメージが、極楽のそれよりもリアルで、人間臭いと指摘している。

いずれにしても少しでも遠くにあってほしい所である。

(伊藤)